

STUDENT EXCHANGE NEWS



近江兄弟社中学・高等学校 国際交流委員会・留学生センターニュース

ISSUED BY THE INTERNATIONAL EXCHANGE COMMITTEE, OMI BROTHERHOOD SR. & JR. HIGH SCHOOLS

ワーヤンカレッジからの初めての受け入れ

5月21日(月)から23日(水)、高校2年生の海外研修旅行(海外研修旅行という名称は1985年に初めて使用された)の訪問先として永年交流をしている香港のワーヤンカレッジ(九龍華仁書院)から生徒18名と先生2名の一行を受け入れました。同校からの生徒の受け入れは初めてです。



ワーヤンカレッジでの交歓会(1979年)

近江兄弟社高校の海外への修学旅行は、1972年の韓国が第一回です。韓国への修学旅行は2回行われ、1975年から1978年は、4回に亘りフィリピンへの修学旅行が実施されました。フィリピンの国情の悪化のため、行き先の変更が迫られました。以前から候補になっていた香港が選ばれ、1979年に初めて、香港への修学旅行が実施されました。1985年から1989年は、中国あるいは台湾に行き先が変更されましたが、「分散型海外研修旅行」の開始された1990年以降はほぼ毎年、香港を訪れています。

今でこそ、最大40名のグループでの海外研修旅行であるが、1979年当時は、高校2年生全員(4クラス、約150名)での訪問であったので受け入れる方は大変であったと思われます。こちら側の熱意だけではなく、わたしたちを受け入れてくださったワーヤンカレッジの温かい気持ちがあったことは疑いの余地がありません。およそ40年の時を経てようやく相互交流にたどり着いたことはとてもうれしいことです。

今回のワーヤンカレッジのメンバーの中心は

音楽サークルの生徒たちで、美しい音色を滞在中に何度も演奏してくれました。引率のLesley Ka-Hei Chan先生は、ワーヤンカレッジを卒業した音楽の先生です。もう一人のTimothy Chow先生は、恩師でもあるそうです。その音楽サークルが立ち上がったのは、本校の修学旅行がきっかけであったということが、次の文章でわかります。

「はじめの交換儀式の中で、中国琴の演奏がありました。前回訪問の際に、本校生徒有志による琴の演奏があり、それを聞いて刺激された諸君が、手づから琴の製作に取り組み、また練習を重ねて、今回その自作の中国琴による演奏をして歓迎してくれたというわけです」(校長・修学旅行団長川田慶三 1981『香港・マカオへの修学旅行文集』より)



その際の有志生徒が核になって音楽サークルが組織されたとのことです。

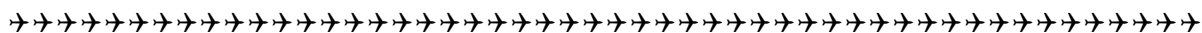
一行は京都のホテルに滞在し、3日間バスで学園に来てくれました。初日は、歓迎会のあと、高1の音楽の授業に参加・交流をし、終礼や掃除体験、中1の合同終礼に参加し、演奏をし

した。2日目は食堂でランチ体験、昼休みは本館ロビーでバイオリン独奏のコンサート、午後は日本文化体験（大正琴と琴）、放課後は市内散策と国際交流部の案内で弓道部見学、その後国際交流部の歓迎パーティが行われました。



最終の3日目、昼食のあと、再びロビーコンサート。5時間目は、高2の全体集会で演奏をしてくれました。6限目は4つのグループに分かれ、中高の授業に参加しました。放課後は、書道部および茶道部との交流会があり、最後に書道部のパフォーマンスを見学しました。その場で、校長参加の修了式が行われ、記念品を交換しました。

3日という限られた時間とはいえ、中身の濃い国際交流ができました。これを機会にさらに両校の交流が発展していくことが期待されます。



留学生を受け入れて

(ホストファミリー感想)

英語学習のモチベーションが上がる

131 泉真惟子

姉妹校 St.Patrick's College 交換留学生ホスト生徒



私はオーストラリアのタスマニアからの留学生であるリアーナをホストしました。私がタスマニアに行ったときは最初はとても緊張したので、「緊張してる？」とリアーナに聞くと、「全然してないよ!」と返ってきたので、とても驚きました。

それからすぐに仲良くなれて、家で共通の友達や、趣味の話で盛り上がりました。リアーナはヴィーガン（Vegan:完全菜食主義者）だったので、食べられるものを探すのは大変でしたが、意外と納豆やわさびなど、日本人でも好みがあ

かれるようなものが好きだったりしたのでとても面白かったです。特に、納豆はすごくお気に入り、タスマニアに持って帰るほどでした。

リアーナが家に来たのは春休みだったので、何がしたい？と聞くと、広島に行きたいと言ったので、急遽広島に行きました。なぜ広島に行きたいのかと聞いたら、日本の歴史を見たいからと返ってきて、日本の歴史を理解しようとしてくれているところにとっても感動しました。他にも、USJ にガビーとガビーのホストファミリーのひろちゃんと行ったり、とてもたくさんの観光地に行きました。普段ならこんなに短期間にいくつもの観光地に行くことはなかったのでとても楽しかったです。

去年の夏に私がタスマニアに行った時に、ホストファミリーにとっても親切にしてもらえたので、私も恩返しができるようにと思い、今回初めてホストファミリーをしました。気遣ってあげたり、普段よりも考えなければいけないことが多かったのでホストをする側の大変さを知ることができました。

最後にリアーナが、タスマニアに帰りたくない、まだ日本にいたいと言ってくれたのがすごく嬉しかったです。そして、また日本に留学したいと言ってくれたので、日本でもっと学んだり過ごしたいと思ってくれていることにとっても感心したし、嬉しかったです。今は会えないけど、自分ももっと英語を勉強して、次にリアーナと会うときにもっと英語を話せるようになりたいと思い、とても英語を勉強するモチベーションが上がりました。そしてまた、日本かオーストラリアで会いたいと思います。

留学レポート

貧しい国が貧しいわけではない

G38 山本 龍成

"Meet the children of the world" (Cambodia)

2018/3/21 ~ 29

アンコール朝時代の遺跡が残り、ポルポト独裁政権の惨禍も残っているカンボジアで、孤児院『希望の家』の子ども達との出会いから、自分の道を「平和の使者となる」と心に誓った G38 山本龍成君の春休みの体験です。

僕は春休みにカンボジアの孤児院で、ボランティアをしました。僕は日本にいる間、ボランティアを通して何かを変えたい、支援したいと思ひ、様々なボランティアに参加してきました。その中で、「日本は恵まれている、もっと大変な国がある。何かしなあかん」と思っていました。そんな時たまたまカンボジアで孤児院を運営している人と出会い、お話を聞いてすぐ、貧しい国に支援をする手伝いをするチャンスだと思ひ、カンボジアに行くことを決めました。

しかし、実際に行き僕がしたことは、料理のお手伝いでも、町の清掃でもなく、家族になることでした。カンボジアの孤児院での7日間は、毎日5時に起きて掃除をしました。

学校のない日には昼過ぎまで寝ている僕がよく起きられたなど今になって思ひます。ただ、あの時僕が家族の一員として出来ることはただそれだけでしたし、一秒でも多く彼らと過ごしたかったのです。朝5時に起きて掃除をしてからは、昼まで中学校へ行き、昼からは日本語学校へ行きます。学校から帰ったら夜まで現地の人たちと過ごす、それなりにハードですが楽しく充実していました。

住んでみるとやはり町の汚さ、臭さ、トイレの使いにくさなど、日本との違いはよく分かります。でも、なぜか、全然いやな気持ちにはならず、不便だとも思ひませんでした。毎日が平和で幸せであふれていたから、気にもならなかったのでしょうか。

その平和、幸せの種は、カンボジアの子ども達と、『希望の家』の僕の兄弟姉妹でした。彼らは毎晩のようにお菓子や果物を僕にプレゼントしてくれました。初めは、孤児院のスタッフの方が買ってくれていると思ひしていました。しかし実際はそうではありませんでした。孤児院の子ども達も、自分の本当に少ないお小遣いで買ってくれていたのです。

彼らは、毎晩「龍成の分だよ、気に入った？」といったような顔で僕のもとへお菓子や果物を持ってきてくれました。お菓子は日本円にすれ

ば、10円にもならないかもしれませんが、でも、彼らが僕に喜んでほしいと純粋な気持ちでプレゼントしてくれたそのお菓子は、どんな高級な食べ物よりもおいしくかけがえのないものです。

貧しいとはお金のないことを言うのでしょうか、貧しいとは教育がないことを言うのでしょうか、いいえ僕は違ひと思ひます。貧しいとは人にあげられるものを持たないことです。それを、カンボジアの兄弟姉妹は普段の生活から教えてくれました。

貧しい国が貧しいわけではない。これからは、このことを心にとめて、同情ではなく人と人々が対等に、相手に対する関心で繋がれるための架け橋になります。

カンボジアの僕の兄弟姉妹に興味を持ってもらえるように、彼らの自慢を僕は続けていきます。



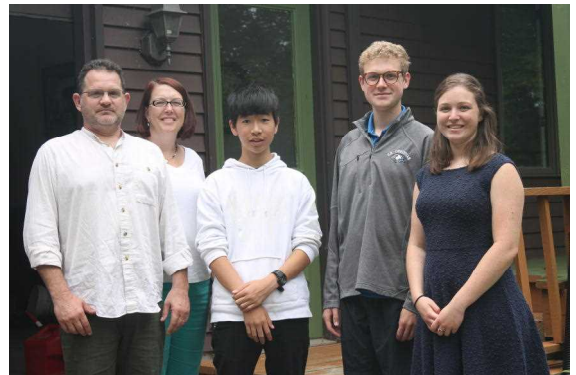
多様な文化の国で学んだこと

I21 長谷川 大翔

姉妹校留学

Grand Rapids Christian High School (アメリカ)

2017/7/29 ~ 2018/3/下旬



8ヵ月間、Grand Rapids Christian High Schoolに留学して、学んだことが大きく分けて4つあります。

第一に英語力とコミュニケーション能力です。最初は学校であまり先生が何を言っているのかもわからず、授業についていくのも大変でした。特にグループワークなどは何をすべきなのか分からず、クラスメート同士の会話のスピードが早すぎたため、輪に入れないことが多々ありました。しかし、私が質問すると、先生や周りの友達が丁寧に教えてくれたため、徐々に英語も上達していきました。更に、僕はそこ

で唯一の日本人だったため、英語の向上はとても速かったです。日に日に英語が上達しているのを感じることができ、4 ヶ月も経てば授業についていけるレベルになり、帰国前には友達は何を言っているかは勿論、英語の映画も理解できるほどになりました。ホームステイ先や友達などと会話するとき、伝わらないときや、相手が何を言っているのかわからなかった時でも、めげずに笑顔で頑張りました。その成果としてコミュニケーション能力も留学に行く前に比べて向上したと思います。

二つ目に、アメリカの文化を学びました。食文化、人気のあるスポーツ、生徒の授業に対する姿勢、学校の様子などを知ることができました。日本人が普段食べない食べ物や、アメリカ人が食べない日本の食べ物なども学ぶことができました。スポーツはアメリカンフットボール、バスケットボール、アイスホッケーが人気で、試合があるたびに祭りのように盛り上がっていました。アメリカの生徒は積極的に授業に参加し、ほとんどの生徒が発表していました。そのような姿勢は留学前の私にはなかったため、見習いたいと思いました。先生たちは、生徒のどんな意見も尊重していて、褒めて伸ばすという指導が多く見られました。Grand Rapids Christian High School は日本の学校に比べて、

あまりルールが無く、生徒一人ひとりがのびのびと学校生活を送れているように感じました。

三つ目に、この留學生活のすべてを通してさまざまな人種、国籍を持った生徒と関わりました。アメリカ人、ヒスパニック系アメリカ人、アフリカ系アメリカ人、中国人、韓国人、ガーナ人、スペイン人などです。食事の仕方一つとっても全然違い、会話をしながら食べる人たち、テレビを見ながら食べる人たち、静かに食事に集中する人たちがいました。他には、選挙ができる年齢、飲酒ができる年齢、車の運転ができる年齢はさまざまでした。彼らとのいろいろな会話を通じて、多様な文化を知り、大きな目標であった自分の視野を広げることができました。

四つ目に、8 ヶ月の留學生活を通して、今まで頼っていた親から離れ、自分の身の回りのことは自分でしなければならないため、アメリカに行く前に比べて自立できました。

最後に今回の留學で出会った人、支えてくれた人、経験したすべてのことにとっても感謝しています。



Grand Rapids Christian High School のマスコット

留学生受け入れ予定

◆交換留学生

イギリスの姉妹校 Woodbridge School からの交換留学生と YFU 短期プログラムの留學生の2名を受け入れます。

学園祭の準備期間から7月中旬にかけての滞在ですが、クラスの活動や授業に参加し、日本語や日本文化について学んでくれることと思います。



氏名：Ward Sebastian (Sebbie)
性別：男子
生年月日：2004/7/21
出身：Woodbridge School (イギリス)
好きな教科：化学、物理、日本語
趣味：InterKarate (Korean),
Gaming, Racket Sports
期間：2018/6/20 ~ 7/17



氏名：Jason Wu
性別：男子
生年月日：2001/5/4
出身：Manhasset High School (アメリカ)
好きな教科：エンジニアリング
外国語：スペイン語、中国語
趣味：レスリング、陸上、サクソフオン、旅行、読書
将来の希望：エンジニア
期間：2018/6/25 ~ 7/20

◆短期ホームステイ

また、オーストラリアの姉妹校 St. Patrick's College から短期ホームステイの一行（生徒19名、先生は Mr. Stephen Boag, Dr. Jules Colman, Ms. Sarah Jago）を7月9日（月）～15日（日）の期間受け入れます。滞在中は、授業参加のほか、一行のための特別授業（華道、箏曲、書道、茶道、浴衣の着付け）、市内散策と町工場見学が組まれています。また ICC クラスとの交流会、小学校訪問、高校国際交流部との交流会などで親睦を深めます。春休みに短期留學で姉妹校を訪れた人たちとの交流会も予定されています。